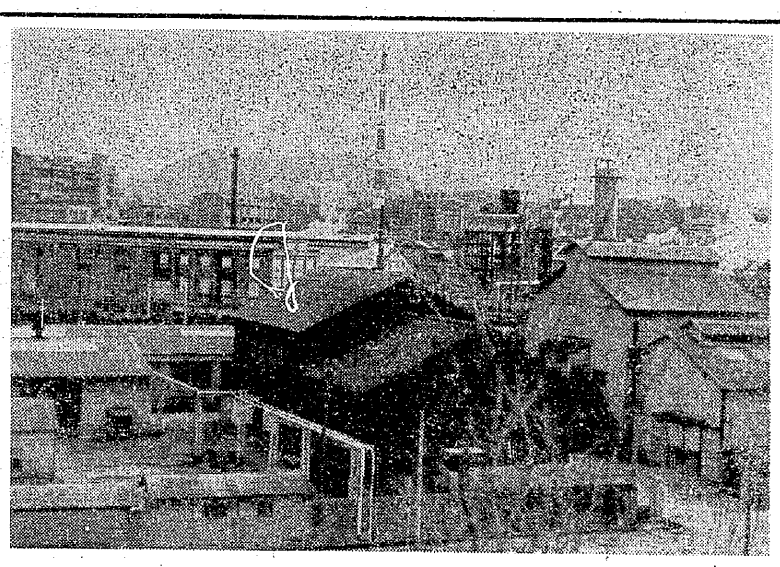
大牟田を覆う合理化の嵐

化学に、三煉に、中小に

今、資本合理化の嵐が大牟田を襲っている。しかも真っ向うから〝人員削減〟を打ち出し、三井東圧化学では大量の海外派遣、三池製煉ではなしくずしの人員削減、中小の鉄工や下請では公然とした首切りさえ行われ、情勢は重大となった。



合理化に見舞われる工業地帯。向うの方が三井東圧化学で、手前の右手が三井三池製煉。

三井東圧化学

三井東圧化学は、すでに新聞が伝えたように、今年の末までに七百人を海外に派遣する計画。ゆき先はアルジエリヤをはじめ、イランやインドシナほか、各地に建設・操業している化学企業。

国内でも、関係会社への出向などで千人を減らす計画。もともと九千五百人という社員数を七千五百人にするというから、規模は大きい。

三井東圧化学は、今生産過剰と円高不況を二重にかぶり、まず生産過剰のため企業の柱の肥料部門は、生産設備の半分という需要しかなく、余剰装置は業界申し合わせにより、自己負担でつぶすという。

塩化ビニールも過剰のため、すでに六割にのぼる装置を封印している。

からくも染料の海外輸出が続いているが、円高の波をかぶり、ウレタリンとともに海外競争に勝てず出血輸出。

三化労組は、合化東圧・全東圧の二労組などとともに「労働者にしわよせするいっさいの合理化に反対する」方針を基本に、闘ってゆくことを決意している。

三井金属三煉

三井金属では合理化提案は、すでに昨年十月明らかにされた。施設が相対的に古い大牟田工場が、その中心的対象になっているが、ここでは「五十四年度末までに八百人の人員削減」を計画。

自然減によるほか、企業集団内外を通ずる強力な人員の再配置などで削減するという。

三煉労組は、鉱業基本法の確立を中心に、国会などにも働きかけながら闘っていく方針。

中小企業でも

すでに片山鉄工所や、橋本鉄工所で、実際的な首切りで合理化が強行され、各事業所の下請各企業で人員削減が進行している。

大牟田の現状は深刻である。

準備すすむ職場新聞活動者会議

新しい出発めざす

全分会から結集しよう

春闘を前にして、三池労組はことしの職場新聞活動者会議を、きたる二月十一日夕から翌十二日の正午にかけ平山温泉で開催する準備を進めている。各分会から活動者は結集しよう。

職場新聞活動者会議の計画の詳細については今検討をすすめているが、今年は特にきびしい情勢のなかで、各職場の全労働者をどう結集するかという重大な課題が職場新聞活動のうえにかかっている。それだけに、この会議のもつ意義はことのほか重さを加えている。

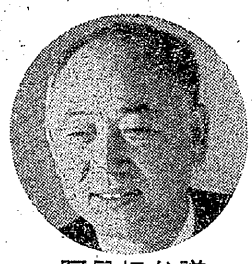
講師も特に日本機関紙協会九州支部から招いて、今日の情勢のもとで職場新聞活動はどうすすめるか、といったことを報告してもらいながら、相互交流を深め、新しい針路を切り開くようにしたいものである。職場新聞のもつ任務は大きい。

迎春

参議院議員　阿具根　登

苦しい年こそ団結固め

明るい灯をともそう



阿具根参議

仲間の皆さん、あけましておめでとうございます。月並みの言葉ですが、今年ほどこの言葉が空しくひびくことはないでしょう。

昨年を省りみますと、二百カイリ問題に始まり、参院選挙、ハイジャック、そして低成長の中で失業増大の構造不況とインフレ、さらに追い打ち的円高不況と、ほんとうに政治、社会の動きが激しく、まさに生活防衛の前途にはられた暗雲を払い切れずに新年を迎え、一九七八年の厳しさを痛感してやみません。

いま誰もが今年こそはと、新しい年に向かって大きく希望を託しておられることでしょう。

私も皆さんの力強いご支援に支えられ、激動の国会を一日も休むことなく、元気で議員会長の重責を果たすことができ、深く感謝しつつ決意を新たにしています。

ともあれ働く者の生活の向上は新しい年に託す第一の希望であり、そのためには落ち込んだ経済の立て直しを緊急課題とし、特に炭鉱労働者もその例外でなく、民間労働者の前途を厳しくしている産業間・企業間格差増大のストップを目ざし、国の経済政策そのものの転換が必要です。

さあ、苦しい年ですが子供たちの将来に明るい灯をともすため団結を強め、共に頑張りましょう。

×

なお筆者は日本社会党副委員長。

退職の人びと

昨年の末に、次の仲間が定年のために三池炭鉱を退職、組織を離れられました。いっそうのご活躍を祈りながら、次にご紹介いたします。

三川指導部関係

原口真砂さん

退職の日　昭和五十二年十二月九日。

お住まい　荒尾市桜山三―一二―八。

工藤　武さん

工藤さん

退職の日　同年同月同日。

お住まい　荒尾市大東区十三班の二。

お言葉「永い間お世話様になりました。先の第四回退職者記念旅行は、終生忘れ得ぬ感激でした。現在機関紙〝みいけ〟に連載中の「原告団レポート」、すでに百七号に及んでいますが、何れも涙なくしては拝読することができません。一瞬の中に一家の大黒柱を奪われ、十余年間の血の滲む思いで闘っこられた遺族。今なお病床に呻吟する患者、並びに家族。それらの仲間の苦しみを思うとき、一人無事に退職ができたと喜んで居られない気持で一杯です。

〝風化砂岩説〟という歪められた学説によって、その上苦しめられる事。然し歴史は必ず証明するだろう。退職後と雖も、CO裁判勝利のために闘います。その事が自分の老後を守り、権利の拡大に通ずるものと確信します。

三池労組に栄えあれ」

梶原定行さん

退職の日　同年同月十五日。

お住まい　荒尾市原万田社宅一区二十七棟。

古賀博文さん

退職の日　同年同月十七日。

お住まい　荒尾市八幡台二丁目十七―六。（電話八局の四四九一番）

×

あとの方については、次号で紹介いたします。

◇　◇

寄稿　退職者　木永国雄

今年も待っている

不知火会の仲間達

毎日のように職場や組合で顔を合わせていても、職種が違ったり作業箇所が違ったりすると、なかなかうちとけて雑談することもなかったが、停年になってようやくその機会を得ました。

それは、数年前までは予想だにしなかった組合の停年退職記念東京旅行に参加したためでした。

東京旅行。それも夫婦同伴。それまでは個人としては計画さえ考えもつかぬことでした。特にわれわれみたいなCO中毒患者や公傷で不具にされた人達は、いざとなると尻込みをせざるを得ない状態でした。

幸に乗り物関係一切、宿泊についても、観光スケジュールについても、勤労者旅行会や組合執行部と班長さんまかせで、ただノンビりと、ワイワイ小学生の旅行のように、また新婚旅行を兼ねてという旧婚組もあったでしょうに、母ちゃんたちのお土産持ちをして東京駅の真中を、いま思い出しても吹きだしたくなるような光景でしたが……。

大阪の関西不知火会、東京の関東不知火会との交流会では、会場づくりから祝宴の準備までして待っていて下さいましたことには何ともいわれない感激でした。

十有余年ぶりに顔を合わせて一目でお互いを探し当てた人。それかと思えば何年間も同じ職場で生活をともにしていながら、よる年波には勝てず、すぐに名前を思いだせずに、酒の力をかりて名乗り合う友。出発まで、船酔いや車酔いの心配をしていたことも、すっかり忘れてしまいました。

木永さん

都合で参加できなかった友の名がでると、やはり残念そうな顔をされます。よほど会いたかったのでしょう。先輩や同志は私たちを待っていてくれたのです。

京都で雨のために駅までタクシーに乗りましたが、その運転手さんは三池争議のとき、全自交のオルグとして車で三池に来、自分の車の中で寝起きをしてホッパーにいたと話されました。

銀鈴タクシーの柔原清太郎さんという方でした。「今日はいまから大阪で、あのとき以来三池を去った仲間たちと交流をやるのです」、というと、「そんなことを毎年しているのなら、一回位は京都でもやって下さいよ」といわれ、「京都が革新の発祥の地でしょうが」。京都は革新の強い所とは聞いていましたが、このような一労働者からの要請もあっているのです。

私は在籍中、若い人たちから「俺たちの頃はもう東京旅行なんか無いだろうな」、といわれたことを耳にしています。

しかし、退職記念の東京旅行と関西・関東両不知火会の仲間が健在な限りその交流は、ぜひ続けていくべきではないでしょうか。

最後になって申し訳ありませんが、終始一生懸命に世話していただいた旅行会の松岡さんや、組合の黒田・中原両氏に厚く感謝申し上げます。

木永さんはいま「荒尾市中央区西十七班」に住んでいられます。いつまでもお元気のほどを。